
Five soldiers' stories

塚矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Five soldiers' stories

【Nコード】

N3052N

【作者名】

塚矢

【あらすじ】

この国では5つの地方で互いに助け合い、支え合って成り立っている国だった。

しかし、3年前に起きたある事件によりその国は戦乱へと変化していった。

互いの国がいがみ合い、憎しみが交差する世界。

魔法を使って、他国の情報を盗む。

暗殺、襲撃。

民達はいつ自分達が殺されるかと不安に駆られて生きていた。

そして、この国に5人の救世主が舞い降りた……

プロローグ（前書き）

処女作です。

なにぶん、至らない点が多々ありますでしょうが、宜しく願います。

この作品はフィクションですので、同姓同名の物が出てても実際とは何の関係もありません。

プロローグ

ある肌寒い冬の日の夜空。

その空は一面の星達が光を放ち瞬いていた。

月の耀さにも負けないくらい。星たちはまるで自分達の輝くという使命を命を懸けて真っ当しうとしているようにも感じられた。

「こんなに明るい夜空は長いこと生きてきて初めてだ。そう、思わないか？」

「そうですね」

「確かに、闇期後は月が活性化して明るくなるのだがここまで明るいと神秘的に感じてしまうな」

「ええ。何かが起こるような、そんな予感もしてきますが」

小高い丘の上に一組の夫婦が座って口を動かしていた。

この国では少しの間、【光】というのを見ていなかった。

丁度、全ての惑星が重なり全ての光を覆いつくす闇が支配する期間。彼らはそれを【闇期】と呼んでいた。

闇期は1年に1回大体12月の中旬頃に3日間程起こる現象だった。この闇期の間は人々は魔法を使い火を起こす。

その火を頼りに3日間を過ごすのだ。

その間は人々は家にこもりただただジッと闇期が過ぎるのを待つ。一般市民も、国のお偉方も、凶悪な者も、魔法使いも。

「……」

「……」

二人共何も喋らない。

しかし、気まづくなることはない。

この夜空はそんな馬鹿げた気持ちすらも和らげて、消してくれる。そんな気がした。

二人は暫く夜空を見つめた後、男が口を開いた。

「そろそろ……戻ろうか」

ポツリと言った。それは、温かみのある声だった。

「ええ」

女は小さく頷いて男に続いて立ち上がる。

そして、自分達の家へ戻ろうと帰路を辿って行った。

夫婦達が森の中へと姿を消した後、夜空はまだ輝いていた。

しかし、突如として5つの星が他の星と違う色に変わり始める。その星は不気味だが、妖しく魅惑的な光を放ち段々と薄くなり、間もなく消えていった。

この小さな変化に気づくものは殆どいないだろう。

そして、この国全体が静寂に包まれていく。
夜はどんどん深まっていった。

プロローグ（後書き）

今回は、プロローグとすることで短めにさせていただきました。

第1話以降では、もうちょっと文章を増やします。

次回更新は今日の夜、若しくは明日になると思います。

デーク地方の勇者（前書き）

処女作です。

なにぶん、至らない点が多々ありますでしょうが、宜しく願います。

この作品はフィクションですので、同姓同名の物が出てても実際とは何の関係もありません。

デーク地方の勇者

「王様！！」

一人の兵士が王室へと飛び込んできた。
その表情は驚愕に満ちていた。

「どうした？」

「つ……遂に、勇者様が我が地方に召喚されました！」

「そ……それは誠か！？　すぐにつれて来い！」

遂に、勇者さまが我が地方に来た。
これで、憎い他地方が殲滅出来る。
そう思うといってもたつてもいられなかった。

此処は……何処だ？

見覚えの無い風景に囲まれ、翔太は困惑していた。
確か、俺は美由紀と一緒に学校の帰り道を歩いていたんだ。
それなのに、何故こんな場所に？

美由紀は……

「よくぞ、おいでくださいました。 勇者様」

「!？」

翔太は後ろから突然声をかけられ驚いた。

しかし、その声には敵意はなく、むしろ歓迎しているかのように柔らかく優しい声だった。

後ろを振り向くと、そこには翔太と同じ年頃だろうか。

白い着物を纏った少女が立っていた。

その少女を見た瞬間、翔太は絶句した。

美由紀……？

「み…美由紀……なのか？」

「残念ながら、美由紀様という方は存じ上げません」

美由紀じゃ…無いのか。

それにしても瓜二つだ。彼氏の翔太が言うのだから余程似ているのだろう。

……

「……此処は何処ですか？」

美由紀似の少女に聞いてみる。

「はい。ここは、キート王国のデーク地方で御座います。勇者様にはこの地方を救っていただく為に、おいでになってもらいました」

……意味が分からない。

夢か？

翔太は自分の頬を引っ張ってみた。

……痛い

ということは、夢ではない。

古典的な方法だが、翔太にはこれ以外に確かめる術が思い浮かばなかった。

今、分かっていることは俺が此処では勇者になっているということ。

そして、俺はこの地方を救うということ。

此処は俺が居た世界とは違うということ。

……美由紀が、いないという…こと。

美由紀……

美由紀に会いたい。

会いたい。会いたい。会いたい。会いたい。会いたい。

美由紀はいつも、俺が落ち込んでいるときには励ましてくれた。
俺が嬉しい時、楽しい気とは一緒になって笑ってくれた。

美由紀は、あまり家族との関係が良いとはいえない翔太にとって唯一の心の支えだった。

「俺が、もと居た場所に、美由紀のところへと返してくれ」

目の前に立っている少女に懇願した。

それで、帰れば良いと思ったが、その淡い望みは直ぐに絶たれた。

「それはなりません。勇者様にはこの地方を救っていただかなければ頂けません」

少女は微笑みながらそう答えた。

「そんな理不尽な話があるか！！ 俺を早く元の世界へと返せ！ 美由紀のところへ返せ！！ 俺は勇者でもなんでもない！」

呼吸が荒くなっているのが自分でも分かった。

俺は自分の心の思いを目の前の少女へとぶちまけた。

翔太の声が反響する。

流石に翔太の気迫に押されたのか、少女は少し困惑と恐怖の意を表した。

「も…… 申し訳ありません。 しかし、本当に出来ないのです。

私達の力では呼び寄せることで精一杯です。 しかし、勇者様がこの地方を救ってくださいれば、元の世界へと帰る事だって出来るかも知れません。 その美由紀様という方にも会えるかも知れません」

少女は俯き加減に答えた。

怒りをぶちまけて少し平静を取り戻したのか、少女の行った言葉を心の中で再生してみる。

少女の言葉には抽象的だが僅かな希望が込められていた。

その言葉が本当かどうかはわからなかったが、この世界の右も左も分からない状況ではこの少女の言う事を信じるしかなかった。

暫く無言の時間が続いたが、ドアがバタンとあける音がその静寂を破った。

「勇者様、王様がお呼びです。 至急、王室へ」

王様が……

あまり乗り気にはならなかった。

が、しかし王様の命令を背くとなるとそれ相応の覚悟が必要だった。まだまだ聞きたいことはいっぱいあったがひとまずその感情は押さえ込み、兵士に付いて王様に会いに王室へと向かっていった。

少女が俺の後姿を凝視してきた。その視線にどんな意味が込められているのかは俺が知ったことではなかった。

俺と兵士は廊下を歩いていた。

無論、会話などはない。

兵士は何か聞きたそうに好奇の目を向けてきたが、俺はその視線を軽くあしらった。

暫く歩いていると目の前には1枚の扉と見張り番と思われる兵士が2人立っていた。

こそそそと、「あれが勇者様か」というような話し声が耳に入ってくる。

「王様の命令により勇者様をお連れしてきた。」

その言葉を聞いて見張り番の兵士達は扉を開けた。

大きな扉が開くとそこには、正に王室！という感じの豪華な部屋が広がっていた。

そしてその奥には、自分の身長の1・5倍はあろうかという大きな椅子に王冠？ を着けた威厳のある人物が座っていた。
まあ、本物の王様というのは見たことが無いのだが。

「勇者様、よくぞおいでになってくれました。 私はデーク地方を統率するクランクと申すものです」

クランクと名乗った人物は決して若いとは言えない人物だった。

が、そのルックスは爽やか系である。

ああ、昔はモテていたのだろうなあ、とうかがえる。

名乗られたら名乗り返すのが礼儀というものである。

「柴崎翔太です」

「流石、勇者様だ。 名前も個性的だし、なんと言ってもそのかっこよさが申し分ない。 そして体から溢れ出てる闘気、貴方様がこの地方に来てくだされば他の地方を救うことも可能です！」

物凄く褒め称えられた。それほど勇者という存在は素晴らしいのだ

ろうか？

翔太にはあまりよく分からなかったがそれは自分が口にすることではないと思い、口を噤んだ。

しかし、まさか自分の容姿が気に入られるとは思わなかった。

翔太は学校ではそれほど目立つほうではない。自分ではルックスも微妙だと思っていた。

自分のことを好きになってくれているのは美由紀だけだと思っていた。

翔太は気づいていないが、学校の女子のなかでは翔太は結構人気が高かった。優しそうな風貌がキユンとくる、らしい。

好意を示してくる女子も少なくはなかったが、翔太は美由紀以外の女子には全く興味が無いので気づかないだけであった。

「俺はそんなに褒められるほどの人物ではありません。それで、この地方を救うとは、一体何をすれば良いのでしょうか？」

早くこの馬鹿げた話を済ませて美由紀の元へと帰りたかった。

「うむ。そのことなのですが、今、このキート王国は5つの地方で分裂しています。互いの国はいがみ合い憎しみあっています。前まではこんなではなかったのです。もっと助け合って生きてきた。なのに、あの事件からは皆変わってしまった。そこで、私達で出した結論では、このデーク地方が全ての地方を征服し、元の平和な世界へ戻すという結論に至りました。勇者様にはそのお手伝いを

してもらいたい。第一線で活躍して頂きたいのです」

なんて、自分勝手なのだろうか。結局は戦いあうんじゃないか。平和というのは建前で、結局は自分がこの国を治めたいだけなんじゃないか？

翔太はそう思ったが口に出せば良い事にはならないのはわかっていた。

「分かりました。それでは、まず始めに何をすれば良いのでしょうか？」

「まずは、勇者様が始めにきた部屋で少女から武器を貰ってきて欲しい。話はそれからにさせてもらいます。といってもあの娘が詳しく話してくれるとは思いますが。」

あの、部屋か。

正直言っであの少女にはあまり会いたくなかった。

美由紀を思い出してしまうから。

だが、会わなければならない。

俺は少し悲觀的になりながらも王室を出てまたあの少女がいる部屋へと戻っていった。

デーク地方の勇者（後書き）

誤字、脱字や不可解な点などありましたら感想欄にてご報告を。

汝、我の主となる覚悟はあるか？（前書き）

処女作です。

なにぶん、至らない点が多々ありますでしょうが、宜しく願います。

この作品はフィクションですので、同姓同名の物が出てても実際とは何の関係もありません。

汝、我の主となる覚悟はあるか？

「勇者様……あの……」

部屋に入ると少女が気まずそうに寄ってきた。

「いや、こちらこそ、すいませんでした。いきなり怒ってしまつて……」

翔太は今更になってさっきまでの少女に対しての応対が恥ずかしくなった。

あまり感情を表に出すタイプではない翔太にとってあんなに激怒するのは珍しかった。

それに、いつもなら怒る前に美由紀に諭してもらっていた。

改めて、美由紀がいないと何も出来ないんだと自分で自分が嫌になつてくる。

「いえ、こちらこそ申し訳ありませんでした」

少女がすまなそうな顔で頭を下げる。

益々、美由紀に見えてきて思わず目を逸らしたくなった。

忘れよう。

美由紀の事はいったん忘れよう。

これじゃただ単に美由紀に依存しているだけじゃないか。甘えてい
るだけじゃないか。

もつと自分でどうにかしなきゃいけないんだ。
だから、美由紀のことは一旦忘れよう。
元の世界へ戻れたら、そしたらまた、美由紀と……

翔太はそう心に誓っていた。

「あ、そんなに謝らないで下さい。それより、武器を貰うとの事だったのですが？」

このままでは謝罪をしあうだけになりそうだったので本題を切り出す。

というより、このままでは自分が罪悪感に満ちて行くような気がしてならなかった。

「はい、王様よりお聞きしております。それでは、こちらへ」

そういつて少女に手を招かれる。

その先には頑丈に鍵がかけられている扉があった。

2重にも3重にも、まるで中に入っている邪悪を決して外へだすまいとでもしているように。

少女がなにやらぶつぶつと呟き始めた。

耳を澄ましてよく聴かないとわからないほどで、しかも何を言っているのかわからなかった。

少女はなにやら真剣な顔で扉へ向かって呟いている。

「、、、…#\$%#”%&……っ！！」

ガチャン

と、鍵が落ちた。

そうか、あれはこの扉を開けるための呪文だったのか。

「どうぞ、入って好きな武器を1つ取り出してください」

言われたとおり、扉を開く途端にモワァ〜と、熱気と鉄の錆びた匂いが立ち込めた。

ウツと顔を背けたが匂いに慣れて来ると思い切ってその扉の向こうに足を踏み出した。

扉の中は暗かった。

足元にはゴロゴロと武器が転がっている。

ざっと軽く見積もっても数千はありそうだった。

この中から一つ……か。

1個づつ見ていくわけにもいかないの、翔太は直感で選ぶことにした。

目をつぶって直感だけを頼りに更に奥へと進んでいく。

奥へ行けば行くほど闇が濃くなっていく。

息苦しい。

何故だかは分からなかったが、何かが口から体中へと浸透して行くようだった。

呼吸が荒くなる。

冷や汗が背中を伝っていった。

……なんだこの重圧は？

正直言つて早く武器を選んでここから出たかった。

なのに、身体はどんどん奥へと進んでいく。

自分の意思とは関係なく、まるで何者かに手招きされてるようだった。

止まった。

手が自然と伸び何かを握った。

ピカッ

閃光が走る。

「うつ」

その途端、俺は身体から自分の意識が離れるのを認識した。そう感じたときには既に白い空間に立たされていた。

「ここは……？」

白い空間が何処までも広がっている。
眼には白しか映らない。

『汝、我の主となる覚悟はあるか？』

なっ……

言葉を失った。

いきなり目の前には赤い剣が出現。
そしてその剣が話すなんて……

『汝、我の主となる覚悟はあるか？』

同じ質問が繰り返される。

口調は穏やかだが何処までも深みがあり威厳のある声であった。

「あります」

『汝、何故我を必要とするか？』

「美由紀の……最愛の下へ帰る為です」

本心だった。

『汝、我と契約せよ。汝の血を我に与えよ』

血……

翔太は唇を歯で力強く噛み切る。
痛い。

赤い唇に真紅の血が滲み出す。
剣の下へと歩み寄った。

唇から血を拭いそれを剣の柄に付ける。

『汝の血を確かに受け取った。我はそなたの目標のために惜しみなく我の力を貸す事を誓おう』

白い空間が崩れていき闇に染まっていく。
完全に闇に染まった空間。

目を凝らすとそこはもと居た場所だった。
片手には赤い剣が握られている。翔太は剣を鞘に納め、少女が待っている場所へと戻っていった。

「まあっ」

少女が口到手をあて驚愕の表情を見せる。

「それは、伝説の宝剣ではないですか！」

宝剣……

確かに、話す武器なんてそういう伝説のものじゃないとないよな。翔太は心の中で苦笑した。

何処まで自分は自分を驚かすのだろう。勇者になって、伝説の宝剣とやらにも認められるとは。

「ええ。　　なんだか、導かれたんです。　　ですが、何故宝剣がここに？」

宝剣というのであれば国の宝にもなるはず。

それが無造作にもここに置いておかれるなんて。

「いえ、この場所は城を立ててから見つけられたのです。調べた結果、当時の盗賊の宝のようでしたが、そのようなものはお見受けしませんでした」

「恐らく、勇者様が入ったことにより眠っていた宝剣が目覚めたのだと思います。　　流石勇者様です！」

そんな、尊敬の眼差しで見つめられても反応に困った。

「いえ、たまたま運がよかっただけです。　　それより、僕は次に何をすればよいのでしょうか？」

「そんなご謙遜を……。　　でも、流石勇者様です。　　勇者様は剣の扱いは出来ますでしょうか？」

剣なんて握ったことも無い。

翔太が元居た世界では剣なんて犯罪を起こすとき意外使うものではなかった。

一般人の翔太にとっては認識の無いものだった。

「いえ、剣は使ったことが無いので……」

「それでは、まずは修行をしたほうが良いと思います。いくら勇者様でも使った事が無いのでは話になりませんからね。」

それはそうだ。

剣の扱いを知らないのに戦ったらそれこそ犬死である。

「それで、修行というのは？」

「私が剣の基本的な扱い方などをお教えいたします。王様からはもう許可が降りていますので」

うーん。なんだかんだいつてあの王様結構人任せ……？

まあ、それは良いとして前から不思議に思っていたことがあるのだが。

「あの、さっきから気になっていたのですがどうやって連絡を？」

「これは、魔法です。魔法で王様と会話しています」

魔法か。

そうか、魔法が使えるのか……

翔太の世界では魔法は廃れ科学が発展していった。

魔法を見るのは初めてだった。

同時に、本の中で見ていた魔法を一度は自分で使ってみたいも思っていた。

「俺でも、使えますか……？」

「簡単なものならば練習すれば使えるようになりますよ。本格的なものはちゃんとした師匠に学んで10数年修行しなければなりません……」

簡単なものでも良かった。

使えるという事実が欲しかった。

「そうですね。では、それも今度教えていただけますか？」

「はいっ」

少女が力強く頷いた。

今の翔太には笑顔が眩しく見えた。

汝、我の主となる覚悟はあるか？（後書き）

誤字、脱字や不可解な点などありましたら感想欄にてご報告を。

次回更新予定は、明日の夜です。

メル地方の勇者（前書き）

処女作です。

なにぶん、至らない点が多々ありますでしょうが、宜しく願います。

この作品はフィクションですので、同姓同名の物が出てても実際とは何の関係もありません。

今回、事情により少し短めです。申し訳ありません。

メル地方の勇者

綺麗！　綺麗綺麗綺麗！！

部屋の壁は全て金色。しかも、壁からは眩しいほどの無数のきらめきが輝いている。

「これ、ルビー！？　これは、これは……エメラルド！　サファイア！　オパール！　凄い凄い凄い！！」

少女が金の壁にはめ込まれている宝石の数々を貪る様に見つめている。

その眼ははめ込まれた宝石の様にキラキラと輝いていた。

「お気に召したでしょうか？」

「もっちゃん！！　気に入らないわけじゃないじゃんっ！　サンキュ、ミール！」

少女が黒い喪服のようなスーツを着ている青年に抱きついた。青年は恥ずかしそうに照れている。

そもそも、何故こんな事になったのか。
それは、遡ること10分前……

緋色麻奈は不思議な部屋に居た。
部屋全体がオーロラのように光を放っていて幻想的だった。

ん？ あれ？ 私、教室で寝てたんじゃなかったっけ？

少なくとも、麻奈はこんな場所へは来た事が無かった。

そもそも、こんな場所は私が住んでる世界には絶対無い。無い無い。
だってあったらとくにテレビとかで宣伝されてるもんね。
まあ、あったとしても私には来れないケド。

そんな事を考えながらボーっとしていると不意にオーロラの空間に
さけめが出来た。

いや、余りにもオーロラの光が強くてそこに扉があるのかわから
なかった。

「眼を覚まされたんですね。 勇者様」

入ってきたのは、いわゆる美青年だった。

ヤバッ！！ 私好みかも！

麻奈は青年の全てを読み取るように青年を凝視した。

「あの、勇者様？」

「え？ ああ、ごめん。私、緋色麻奈っていうの。宜しくね！」

まずは、挨拶。

「あ、僕はミールと申します。勇者様、貴方のような方がこの地方に来てくださり僕達はそれはもうお祭り騒ぎです」

ん？ さつきから気になってたけど勇者って？

あの絵本に出てくるような勇者？ 魔王を倒してくれるやつ？

「勇者？ 私が？」

「ええ。そうです。貴方様は勇者様ですよ！」

OH！ 勇者！

マジか…

こんな私が勇者？

「それ本当？ じゃあ、私凄じゃん！」

「ええ。本当です。しかし、勇者様はあまり驚かないのですか？」

「

何を？」

「此処は貴方が生まれ育った世界ではないのです。我々の都合でこちらに勝手におよびしてしまいました。この点では本当に申し訳ないと思っていますのです」

勝手に。というのが気に入らなかったが、どっちにしろこの世界に来ますか？ と言われたもちろん、来る！！ と即答なので、あまり気にしなかった。

そもそも、麻奈は元々、もっと違う事がしたいと思っていた。

麻奈の家は決して裕福ではない。

むしろ、貧乏だった。両親は自分達が生きるための食費と麻奈を学校に通わせるだけで精一杯だった。

両親ともに、遅くまで働いて帰ってくるのは麻奈がいつも寝てからだった。

朝は早くから出て行き、夜は残業。

家には麻奈がいつも一人でいた。

麻奈は、あまり自分が両親に愛されていないんじゃないかと思った。もちろん、そんなことはないのだが、幼少の頃から親とはあまり触れ合えず一人で育ってきた麻奈にはそう思えてしまうのも仕方なかったのかもしれない。

学校では、いつも活発だった。

ここには、私にかまってくれる人が居る。仲良くしている友達もいるし、女子はもちろん男子も明るくて学校全体が輝いていた。

麻奈には、その活発で陽気で何者にも物怖じしない強さがあった。悪があれば諸悪の根源を叩き潰し、自分に非があればすぐに認め謝

罪した。

そんな姿は皆に、ヒーローのイメージを植え付け、苗字が緋色のところからあだ名はヒーローとなっていた。

もちろん麻奈はそんなあだ名が嫌いではなかった。

そんな愉快的仲間達と離れるのは辛かったが、事あるごとに自分は貧乏だということを思い知らされることがあり、それが唯一のコンプレックスだった麻奈にとってはあそこから離れられるのはありがたかった。

「全然！ それより早く何かしたいんだけど！ 勇者ってなにやるの！？」

「それは後でお教えいたします。今日は勇者様も疲れていると思うので部屋でゆっくりお休みください。案内します」

別に疲れてはいないし、早く教えてもらいたかった麻奈には少し不服ではあったが、ミールが自分を気遣ってくれているという事実は嬉しかった。

よし、決めた！！ 私、絶対この人落とす！！

という誓いを自分で立てた。

そして、案内された部屋。

それは、今までの家からはとても想像出来ないような豪華なつくりだった。

あまりの違いに麻奈が大げさに驚くのもいたしかたなかった。

ミールにとって麻奈は予想外だった。

王女様からは、勇者様は恐らくこの世界にきたばかりでは戸惑い混乱すると思うので、くれぐれも丁寧におもてなしをしてください。

という命を貰っていた。

しかし、実際はどうだろうか。
混乱するどころか喜んでいる。

しかし、ミールにとってはそれは手間が省けるので良かったし。

なにより、麻奈の容姿が気に入った。

黒い髪は何処と無く淑やかさを兼ね備え、顔も美人だった。

その容姿と性格のギャップも良かった。

ミールにとっては、正にこれが運命の出会いというやつだった。

メル地方の勇者（後書き）

誤字、脱字や不可解な点などありましたら感想欄にてご報告を。

次回更新は未定です。

とある朝（前書き）

処女作です。

なにぶん、至らない点が多々ありますでしょうが、宜しく願います。

この作品はフィクションですので、同姓同名の物が出てても実際とは何の関係也没有せん。

とある朝

あの後、俺はこれから生活していくであろう部屋へと案内された。部屋は簡素な造りで窓とベッドが置いてあるだけであったが、スペースが余っているのでこれから自分好みの部屋に出来そうだった。

あの少女には、

「明日から修行は始めるので今日はお休みになられるか外へお出かけしてみてください。良いことがありますよ」

と言われてあった。

そつえば、あの少女の名前を聞いていなかったな。まあ、後で聞けば良いか。

窓があつたので外の様子を伺おうと開け放つ。

清々しい清潔そうな空気とそれに混じって匂ってくる果物のような甘い匂いが鼻腔を擽る。

下へと眼を向けると結構な高さがあつた。ビルの3階ぐらいの高さかな。

外は、賑わっていた。

焼肉を売る屋台の元気なおっちゃんの声や、ブタ(?)のような生き物の芸を笑いながら見つめる子供達もいた。

今日は、お祭りなのか……？

垂幕があつた。それに眼を向けると翔太はすぐに窓を閉め、ベッドに潜り込んだ。

『勇者様歓迎祭』

ずっと窓から頭を出していたから何人かには気づかれたかとも思い、面倒ごとを避けるために今日は寝ることにした。

あれから、どれぐらい寝たのだろうか。

外の賑わいは完全に消え、新たな朝日が昇っていた。

多分、昨日の昼ぐらいからずっと寝てたのかな。

それほど、翔太の精神と身体にかかる負担は大きかった。

……おながすいたな

恐らく、待つていれば誰かが来て何かしらしてくれるのだろうか、今の翔太は過度の空腹とこの部屋以外はどうなっているのかという好奇心が満ちていたので、衝動的に部屋のドアを開け、廊下へと出た。

昨日は動揺してて気づかなかったけれど、こんなに広がったのか。それは、翔太が知っている、学校の廊下とは比べ物にならなかった。横幅は学校の教室の2倍ぐらいもあるかというぐらいである。

その広い廊下をずんずんと歩いていく。さすがに、まだ朝日が昇ったばかりなので辺りは静寂に包まれていた。誰も、起きてないのか……？

気づけば、自分が今きた道もわからなくなってしまった。

どうしよう。

廊下を歩いていて迷子になるなんて経験は2度とないだろう。流石に、ヤバイかなと思ひ翔太は近くにあった部屋の扉を開いた。これだけ広いのだから地図とかがあってもおかしくはない。厨房とかに出られればその人に教えてもらえれば良い。

そんな思い出ドアをコツコツとノックし、

「失礼します。あの、迷ってしまって戻る道が分から……」

そこまで言って翔太は言葉を切った。
目の前に写る光景に呆然としてしまう。

そこは、厨房等ではなかった。

昨日の少女……

そこには、昨日の少女がベッドに横たわっていた。
昨日のような格好ではなくいくらかルーズで薄手のものだった。
思わず見入ってしまう。

……これじゃまるで、襲いにきたみたいじゃないか。

違う。そんなことはない。俺は道がわからなくなったただけだ。
そんな感情は無い。

翔太は自分に言い聞かせた。そうだ、ちょっと起こして道を聞けばいいんだ。
そしたら、邪魔にならないように朝食ができるまで自室で待っていればいい。

うん、それだけだ。

軽く少女を揺すって声をかける。

「あの、道がわからないのですが……」

ピクッ

と反応があったが、瞼は閉じたままだった。

起きない。

もう一度。

今度は強く揺すってみる。

「ん……うう、んむ……」

起きた……？

少女はその重たそうな瞼を気だるそうに開けた。

そして、翔太を認識したとみるや、ダッシュで部屋の隅まで移動した。

「ゆ……勇者様っ！ そんな、朝からだなんて……」

何を勘違いしているのか、少女は顔を真っ赤に染めて俯きながら言った。

「いや、そういうのではなくて、」

「ちょ……ちょっと顔をああ洗って来ますっ！」

そついうと少女はせかせかとドアを開け、ボタンと閉め、部屋を出て行った。

もしかして、変な誤解されたかな？

俺は、変態ではないのだけれども……

少女の反応を見る限り明らかに純粹無垢であり、弁明が難しそうだ、と、気分が重かった。

暫くすると、少女が出て行った扉がまた開いて、少女が顔を出す。

「それで、何のようですか……？」

明らかにさっきのことを誤解している。顔にそう書いてあった。

「えと、自分の部屋がどこだか分からなくなっちゃったんですけど

……」

「それで、女性の部屋に勝手に押し入ってきて体に触ると」

痛いところを突かれた。事実だがそんなやましい事を考えていたのではないということを知ってもらいたかった。

「……」

「……」

気まずい雰囲気。少女の視線が重い。ずっとこちらを凝視している。

「……さっきは、本当に質問しようとしただけで、別にそんなやましいことなんて考えてないんです」

「……」

「まあ、いいですよ。自室に戻るのですか？ それとも、朝食を準備致しましょうか？」

良かった。なんとか、誤解を解けたようだった。なんだか、心が軽くなるのが自分でも感じられたような気がした。

「じゃあ、朝食を……」

「わかりました。では、着いてきてください」

そういわれ少女はスタスタと歩いていく。

翔太もその後を着いてった。

たどりついたのは、厨房と思われる場所だった。個人の場所なのか、小さいキッチンが一つとテーブルとイスが置いてあるだけだった。

「そこに座っていて下さい。すぐ準備します」

そういわれたので翔太は静かにイスに腰掛けた。

少女の服装は昨日のような白い着物でもなく、朝にみたルーズな薄手でもなく、私服という感じだった。

といっても、少々蒸し暑いので結構露出があるものを着ていた。うぶな翔太にとっては少し刺激が強かったが、気にせずにテーブルに目を落とす。

そこには、どんどん朝食が並べられていた。

どれも見たことが無い料理だったが、それから発せられる香ばしい匂いが食欲をそそる。

10分もたつと、豪華な朝食が出てきた。

「どうぞ」

少女がスプーンを手渡してくる。

「いただきます！」

俺は声を上げると同時にがつついた。

今まで生きてきた中でここまで空腹を感じたことは無かった。

俺は、用意された食事をすぐに、たいらげた。

少女はそんな俺の姿を見て、うんうんと頷いた。

「気に入っていただけたようで嬉しいです」

「有難う…… そっいえば、名前、まだ聞いてなかった」

「えっ！？ そうでしたっけ？ 私の名前はミューです。改めてよろしく願います」

ミューか。

なんか、どこかのゲームでいたようないなかったような……

「宜しく、ミュー」

笑顔で言葉を返す。

少し、ミューの顔が赤く火照ったような気がしなくてもなかった。

とある朝（後書き）

誤字、脱字や不可解な点などありましたら感想欄にてご報告を。

次回更新予定日は、明後日昼です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3052n/>

Five soldiers' stories

2010年10月9日12時50分発行